

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

●東北学院大学文学研究科アジア文化史専攻

「遺跡遺物資料処理技能開発の日中韓協同推進」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本取組の中核の1つである「史料情報処理技能」、すなわち「遺跡」の物理探査・GPS 測量、「遺物」の3D 計測・データベース化、民俗・民族「資料」や近現代史上の証言のアーカイブス化のために購入した機器の操作技能や各種情報の処理技能を、演習科目や特別学外実習の場を利用しながら複数分野の院生に共同して習得させ、あるいは理解をさせ、その上で論文作成や就職後の遺跡調査や史料調査等に有効活用させることである。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ①「史料情報処理技能」を円滑にかつ継続的に習得させるためには、TA 制度も活用して、本プログラムに参加した後期課程院生に前期課程院生の、前期課程院生には将来の院生候補である学部生の技能指導の補佐をさせた。
- ②1 リサーチ・プロジェクトあたり2 分野以上の院生を参加させ、「学際性」や「分野横断性」への理解を高めた。
- ③物理探査や3D 計測等の専門性の高い技能については、専門家を招聘して現地講習を開催した。
- ④「日中韓協同推進」については、客員教授や取組関連国際シンポジウムで招聘した中韓の講師から現地指導・助言を得たり、後述する中韓での「学外実習」において各種の処理技能を積極的に活用するよう促した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ①考古学と民俗学分野の院生のなかには文化財・教育文化分野に就職した者がいたので、今後習得した技能や視点を有効に活用できるであろう。
- ②単独プレーの多い歴史学分野の大学院生の「学際性」や「分野横断性」、「現地調査」への意識が各段に高まり、史料収集にあたって積極的に「撮影・データベース構築技能」を活用する者が従来と比べて増加した。